

Aichi University

Lingua



INSTITUTE FOR LANGUAGE EDUCATION, AICHI UNIVERSITY

No. 26 November 2025



黄ばみの頁に、日本語への想い

「日本語に惚れ込んだ日——真夏に出会った一本の年輪」より

CONTENTS

〈特集〉 心に残る1冊——学生時代に読みたい本

・ 日本	日本語に惚れ込んだ日 ——真夏に出会った一本の年輪	法学部	鄭 高咏	……2～3
・ ドイツ	ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』を読む ——もし人生のレールから外れてしまったら	文学部	河合まゆみ	…… 4～5
・ フランス	正義とは何かを問いつけるレ・ミゼラブル	経営学部2年	島田 歩実	…… 6
・ ロシア	泥臭く生きることの大切さ	国際コミュニケーション学部4年	川嶋信太郎	…… 7
・ 英語	理系の本からの始まり	国際コミュニケーション学部3年	後藤花菜子	…… 8
・ 韓国	韓国の過去と今をつなぐ一冊 ——ハン・ガン『少年が来る』を読んで	経営学部3年	中村 安希	…… 9
・ 日本	一打の行方	経営学部4年	棚橋 美月	…… 10
・ 中国	余韻を残す一杯の茶 ——『茶館』で出会う中国語と人生	現代中国学部	劉 乃華	…… 11～13

〈名古屋キャンパス〉 名古屋語学教育研究室のおもなサポート内容 …… 14

〈豊橋キャンパス〉 ランゲージセンターは Center Bldg. 2階にお引越ししました！ …… 15

2025年度外国語検定試験奨励金制度のご案内／編集後記 …… 16

心に残る1冊

学生時代に読みたい本

日本語に惚れ込んだ日 ——真夏に出会った一本の年輪

書籍名：日本語の年輪 著作者：大野 晋

法学部
鄭 高咏

1988年の夏。東京の池袋駅西口にあった芳林堂という大きな書店で、一冊の文庫本と出会った。当時、わたしは中国から日本にやって来たばかりの留学生だった。昼間は大学に通い、夜はコンビニでアルバイトをして学費と生活費を稼ぐ日々。まだ言葉も文化もよく分からない中、とにかく毎日、生きるのに精一杯だった。

その日もバイト帰りの夜だったと思う。汗ばむ服のまま、ふらっと立ち寄った書店で、一冊の小さな本を見つけた。書棚の片隅にひっそりと並ん

でいた、その本のタイトルは『日本語の年輪』。著者は大野晋とある。国語学界の第一人者である偉大な学者の名前を知る由もなく、「すすむ」という名前すら読めなかったが、「年輪」という言葉に、なぜか静かな引力を感じた。母国では言語には関心があったが、「日本語」はまだわたしにとって「外国語」であり、文法や語順に戸惑い敬語に緊張しながら、たどたどしく話すレベルだった。でも、『日本語の年輪』に出会ったとき初めて、「日本語という言葉の奥底には、何かもっと深いものがあるのかもしれない」と感じたのを覚えている。

『日本語の年輪』は、日本語の語彙や表現の変化を「木の年輪」にたとえ、言葉の中に刻まれた感情や文化の変遷を読み解いている。言葉は生きていて、時とともに変わる。そして、その変化の中には時代を生きた人々の思いや社会のかたちまでもが映し出されているのだと、この本を読んで初めて気づかされた。

たとえば「うつくしい」という言葉。現代では「美しい」の意味だが、奈良時代には「小さくて愛らしい」ものへの親密な感情を表していたという。何気なく使っていた言葉の奥に、まったく違う価値観が息づいていた。言葉は、人の心のかたちを映す鏡なのだ。

本書36頁にある「わび」「さび」の話も忘れられない。「それを消極的なものと見るのは誤りである。」「わび」も「さび」も、簡素な趣味に徹して、成金性、俗物性に抵抗し、物の豊富さよりは、心の自由さを重んじようとする強い精神に支えられた美であることを見なくてはならない。」と書かれている。



日本生活のスタート地点
——東京都杉並区西荻窪

わたしの育った中国の文化にも、孤独を詩に昇華する伝統がある。しかし、「孤独そのものを美として受け入れる」という「わび」「さび」の思想には、しばし息を呑んだ。日本語はただ情報を伝えるだけの言葉ではない。日本人の人生そのものの在りようが、そこに宿っているのだと、わたしは深く思った。敬語表現に見られる社会構造（「あげる」「くださる」「いただく」など）にまつわる気づきや、「美は無言の天使である」などのフレーズも、美しく印象的だった。

この本との出会い以来、わたしは「日本語を話す」よりも「日本語を感じる」ことを目指すようになった。意味を考えるだけでなく、言葉の奥にある温度や音の響きを受けとめたいと思うようになった。今でもわたしは月に一度、日本人向けの朗読講座に通っている。声に出して読むことで、言葉の余韻や間を身体で味わう。その積み重ねの中で、日本語はわたしの中に静かに根を張っていった。

今も手元には、あのととき芳林堂で手に入れた『日本語の年輪』がある。昭和48年発行の第6刷。定価110円。長くて貧しい学生時代に何度も読み返したその本は、日差しのせいか、ずいぶん黄ばんでしまった。でもわたしにとっては、いつまでも変わらぬ「言葉の原点」なのだ。あの夜、疲れた体で書店の棚の前に立ち、そっと手に取った一



黄ばみの頁に、日本語への想い

冊が、わたしの人生を静かに、でも確かに変えていった。

『日本語の年輪』——それは、言葉を通して人間を見つめる静かな旅へと導いてくれる。

日本語を母語とする人にこそ、あらためて手に取ってほしいと思う。自分たちの言葉の奥に、これほどまでに深く豊かな文化と感情の層が重なっていたのだと気づいたとき、自分の知らなかった日本語が心の中で新たに芽吹きはじめるはずだ。

わたしはこの本と出会った日、日本語に恋をした。そしてその恋は、三十年以上経った今も、静かに、けれど確かに続いている。

※本文の日本語表現について助言をくれた家族に感謝する。

ヘルマン・ヘッセの 『車輪の下』を読む ——もし人生のレールから 外れてしまったら

書籍名：車輪の下 著作者：ヘルマン・ヘッセ

文学部
河合まゆみ

「心に残る一冊」を選ぶのは難しい。専門であるドイツ文学に限っても、とても一冊には絞れない。ずいぶんと昔の話になるが、自身の学生時代を思い返すと、最も衝撃を受けた作家はトーマス・マンであったと思う。彼が20代前半で書き上げたという『ブッデンブローック家の人びと』を読んだとき、同じ20代として圧倒された記憶がある。ただ、マンの作品はとにかく長い！『ブッデンブローック家の人びと』も岩波文庫で上中下の三冊ある。短い作品としては『トーニオ・クレガー』がすぐに思い浮かぶ。これも学生時代に魅了された作品だが、作中の第4章で芸術家論争が始まると、そこで読むのをやめてしまう人がけっこういるらしい（実際、学生さんからそういう話を聞くので）。では、少し見方を変えて、自分が学生時代に（今風の言い方をすると）一番ハマった作家は誰かと考えてみると、それはヘルマン・ヘッセであろう。まだそれほどドイツ語がで

きい学部生の頃だったので、もちろんどの作品も翻訳で読んだ。そのなかでどれが一番かは決めかねるが、「学生時代に読むべき」という意味で『車輪の下』を選びたい。みなさんにはぜひ作品を読んでいただきたいので、ネタバレはなるべく避け、作家や作品をより深く理解し、楽しむためのヒント（裏話？）を以下で紹介していく。

ところで、ヘッセとマン、この二人のノーベル賞作家に共通するのは、大学を出ていないということである。ドイツの大学には入学試験というものがなく、日本の高校にあたるギムナジウムの卒業資格がそのまま大学の入学資格になる。ところがヘッセもマンもギムナジウムを卒業することができなかった。当時のドイツの厳格な学校教育になじめなかったわけだが、とくにこの学校教育に苦しんだのがヘッセであり、その作者自身の体験が『車輪の下』を生み出したといえる。

『車輪の下』はヘッセの自伝的小説であるため、まずは作者の生い立ちを紹介する。南ドイツのシュヴァーベン地方、鬱蒼と広がるシュヴァルツヴァルト（黒い森）の谷あいにあるカルフという町で、ヘッセは敬虔なプロテスタント一家の長男として生まれた。ナゴル川が流れ、木組みの街並みが美しいカルフの町は『車輪の下』の舞台にもなっている。両親ともに伝道活動に従事しており、母方の祖父はインド言語の著名な研究者であった。また、同じく伝道師であった母方の従弟は日本に滞在していたこともある。このあたりに、ヘッセと東洋思想の接点を見出すことができる。10代の初め頃にはすでに詩人になりたいという明確な願望を持っていたにもかかわらず、生まれながらに神学の道に進むというレールを敷かれていたヘッセは、まずラテン語学校に通ったあと、難関の州試験を突破して名門のマウルブロン神学校に入学する。しかし、厳しい戒律が支配する全寮制の寄宿生活になじむことができず、精神的に病んでしまい、半年余りで学校を脱走する。いったんは連れ戻されるものの、頭痛や不眠症に悩まされ、結局退学となる。その後、預けられた



作品の舞台にもなったカルフの街並

出典：<https://pixabay.com/ja/photos/カルフ-歴史的中心部-トラス-2216319/>

牧師の下で自殺未遂事件を起こしたり、ギムナジウムに入るも続かず、エリートコースから外れた時計工場の見習いなども経験している。こうした精神的に不安定で危機的な道程を『車輪の下』の主人公ハンス・ギーベンラートも同様に歩むのである。作品の結末、ハンスは自殺とも思えるような溺死をとげるが、これは、自ら命を絶ったヘッセの弟がモデルといわれている。ヘッセ自身は、18歳で書店の見習いとなり、念願であった詩や散文を書き始めるようになると、ようやく落ち着いた生活を取り戻す。つまり作者ヘッセ＝主人公ハンスという単純な図式ではなく、むしろ神学校からの脱走、精神的危機の克服、詩人としての大成といった要素は、ハンスの親友のヘルマン・ハイムという登場人物に受け継がれている（H-Hというイニシャルも同じである）。

ところで作品のタイトル『車輪の下』であるが、ドイツ語で *Unterm Rad* という。*unter* は「～の下」、*Rad* は「車輪」を意味する。これは、*unters Rad kommen* というドイツ語表現からきており、直訳すると車輪の下敷きになる、つまり落ちぶれるという意味である。作品中、主人公が校長室に呼び出され、「がんばらないと、車輪の下敷きになってしまうよ」と校長から忠告されるのだが、そこでこの言い回しが使われている。ただよく見ると、若干の違いがある。*unterm* は「車輪の下で」と場所を表し、*unters* は方向を表して「車輪の下へ」となる。つまりタイトルのほうは、現状、もう車輪に敷かれて、押しつぶされてし



世界遺産 マウルブロン修道院

出典：<https://pixabay.com/ja/photos/修道院-マウルブロン-建築-1920129/>

まっているという意味になる。これまでの邦訳タイトル『車輪の下』が定着してしまっているが、光文社から松永美穂氏の翻訳『車輪の下』（2012）が出た時は、思わずうなってしまったものだ。さて本題に戻って、主人公ハンスがその下敷きになった車輪とはなんだろうか？ 権威主義的なドイツの学校制度という大きな歯車に巻き込まれ、その下敷きになってしまった。あるいは周囲の大人たちの身勝手な期待に押しつぶされてしまったともいえる。しかし作者ヘッセは、一度レールから外れてしまったが、試行錯誤、迷いと苦悩の末、詩人として自らの道を歩み出すことができた。

ヘッセ作品の翻訳はどれも現在入手可能であり、主要作品は新しい訳で読むことできる。ぜひこの機会にヘッセにハマる人がでてくるならばうれしい限りである。

正義とは何かを問い続ける レ・ミゼラブル

書籍名:レ・ミゼラブル 著作者:ヴィクトル・ユゴー

経営学部2年

島田 歩実

私は『レ・ミゼラブル』を読んで、多くのことを学びました。それは「人はいつからでも変わる」ということ、人を赦すことの尊さ、人生の選択の重み、そして真の正義とは何かを深く考えさせられることでした。

特に心に残ったのは、主人公ジャン・バルジャンがミリエル司教に赦される場面です。パンを盗んだ罪で19年間も投獄された彼は、社会から拒絶されました。しかしミリエル司教は、彼が自分の金品を盗んだにも関わらず「これは私があげたものです」とかばい、さらに大事にしていた燭台までも与えて「善人として生きなさい」と告げます。この無償の愛と赦しに触れたジャン・バルジャンは改心し、孤児のコゼットの親代わりとなって数々の善行を積み、生き直しました。私はこの物語から、どんなに苦しい状況にあっても人間には希望があり、過ちを犯しても誰かの信頼や愛があれば人生をやり直すことができるのだと深く感じ、心を打たれました。実際に私も子どもの頃、友達と喧嘩をして言うてはいけない言葉を言うてしまったことがありました。その時、友達が私を許してくれたことで、罪悪感から解放さ

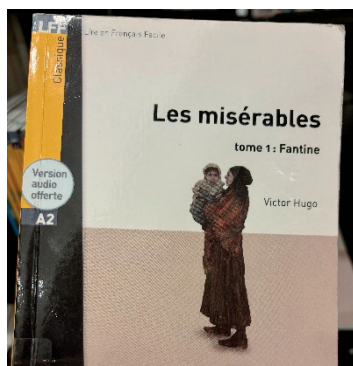


愛知大学図書館にて

れ、もっと優しい人間になろうと決心できました。

また、この物語は「正義とは何か」という問いも投げかけています。ジャン・バルジャンを追うジャーベール警官は法律こそ正義と信じていましたが、ミリエル司教は「赦し」にこそ真の正義があることを示しています。私ももし同じ立場にいたら偏見を持ってしまうかもしれませんが、この物語の教訓を生かして、どんな人にも偏見を持たず生きたいと思いました。

私は、大学生活の中で、経済的に厳しい状況にありながらも、真剣に学び続ける友人たちの姿を目にし、その努力とたくましさで心を打たれました。SDGs（持続可能な開発目標）の「すべての人に質の高い教育を」や「貧困をなくそう」といった目標が、自分にとっても身近で切実な課題として感じられるようになりました。こうした経験から、社会における格差や貧困の深刻さを実感しています。『レ・ミゼラブル』に登場する、貧しさに苦しむ人々や、家族のために自らを犠牲にする人物の姿、さらには社会的不正義と闘う描写は、現代の私たちが直面する社会問題と深く結びついていると感じさせられました。この作品が150年以上も世界中で読み継がれている理由が、今の私にはよくわかります。これからもこの物語を胸に、困難に直面する人たちに寄り添い、社会の不平等をなくすために何ができるかを考えながら、大学生活を送りたいと思います。そして、多くの人にこの本を読んでほしいと心から願っています。



レ・ミゼラブルの表紙

泥臭く生きることの大切さ

書籍名：オブローモフの夢 著作者：ゴンチャロフ

国際コミュニケーション学部4年
川嶋信太郎

『オブローモフの夢』を読んで、私はとても不思議で、少し悲しい気持ちになりました。この話は、主人公オブローモフが、子どものころに過ごしていた田舎の生活を夢に見る話です。その夢の中では、毎日がゆっくり流れていて、人々は急ぐこともなく、のんびりと平和に暮らしています。何かをしなければならないというプレッシャーもなく、ただのどかに生きています。そんな世界が、とても心地よく描かれていて、読んだ時、私も、その場所に行ってみたいと思いました。

でも、その夢の中の世界は、とても楽そうで、安心できる場所だけれど、同時に「何も変わらない世界」だと思いました。オブローモフは、その夢のような生活を大人になってからも理想としていて、働くことや何か新しいことに挑戦すること、泥臭く生きることを避けてしまいます。最初はそれがただの怠け者のように思いましたが、読み進めるうちに、オブローモフは本当にその生活を大切に思っていて、無理に自分を変えることができない人なのだと感じました。

私はこの本を読みながら、自分もとてもオブローモフに似たところがあると思いました。学校の勉強や部活、アルバイト、人間関係など、いろいろと忙しい毎日の中で、「何もせずに1日を過ごしたい」「何事にも急かされずに過ごしたい」と思うことが多々あります。また、過去にはそのような生き方をしていたこともあります。でも、もしずっとそのような考えで生きていたら、自分のやりたいことや成長のチャンスを失ってしまうことや、それだけではなく周りから遅れてしまう可能性があることにも気づきました。オブローモフも、夢の中の世界にとらわれすぎて、現実の人生を前に進めることができなくなってしまったのだと思います。

『オブローモフの夢』は、最初に読んだ時はただののんびりした話だと思ったが、実は「自分はどうか生きていきたいのか」「本当に幸せって何だろう」と考えさせてくれる物語でした。楽で安心な世界にとどまることは簡単で楽しいと思うけれど、そこから一歩を踏み出す勇気、泥臭く生きることがとても大切で、後からとてもタメになるのだと思います。

私も、自分の夢や目標に向かって、泥臭く、目を背けず少しずつでも前に進んでいきたいと思います。



こちらの本を題材にしました。



これからも泥臭く生きていきたいです。

理系の本からの始まり

書籍名：意識はいつ生まれるのか
——脳の謎に挑む統合情報理論

著作者：マルチェッロ・マッスィミーニ／ジュリオ・トノーニ

国際コミュニケーション学部3年
後藤花菜子

マルチェッロ・マッスィミーニとジュリオ・トノーニが書いた「意識はいつ生まれるのか——脳の謎に挑む統合情報理論」という本が心に残る一冊です。こちらの本を選んだ理由は、高校時代までさかのぼります。私は持病があるため、全日制高校に通えず通信制高校に通っていました。

私の通っていた通信制高校では大学に進学する人はごく一部で、多くは就職するか、フリーターになるかです。私自身も進路に迷っており、大学進学は視野になく高校を卒業した後は自衛官か警察官になろうとしていました。

そのとき、偶然に高校の図書館にあったこの本を見つけました。“意識はいつ生まれるのか”そ

のタイトルは当時、不眠症で苦しめられていた私にとっても刺さりました。

タイトルから分かる通り、理系の本だったので科学が苦手な私は最初、読むのをやめようと思いましたが、自身の好奇心に負けて、この分厚い本を開きました。

この本は私に将来の道を与えてくれたと感じています。本の内容はニューロンやシナプスなど多くの理系用語が出てきますが、知識がない私でも非常に分かりやすく、のめり込むように読んでいました。科学者とは、研究者とはこんなに難しい内容でも比喻を使ったり、言い換えたりすることで、何も知らない人に新しい知識を授けられるのだと感動しました。

私はそこから学問に興味を持ち始めました。理系には向いていなかったのと、コロナ禍の混迷を経験したことにより、政治の勉強をしたいと思い始めました。勉強も小学5年生の算数から始めて学問、研究への憧れをモチベーションにして第一志望であった本学に合格することができました。

この本は確かに、“人の脳で何が起きているのか”という事を教えてくれました。しかし、それだけではなく私にとっては“学問を極めることの素晴らしさ”を教えてくれました。この本に出会ったおかげで、大学では自分の専攻に集中し、とても充実感を感じています。また、このような感動や発見を人々に分かち合いたいという思いを抱くようになりました。この本に出会わなければ私の人生はまた大きく変わっていたことでしょう。それもそれで楽しいことはあったかも知れませんが、私はこの本に出会えて、今の環境に出会えて心から良かったと感じています。この先、私が10代の時にそれなりのどん底にいたようにどうなっていくかは分かりませんが、その度にこの原点に帰って自身を見つめ直し立ち上がりたいと思います。



教室の風景



図書室

韓国の過去と今をつなぐ一冊 ——ハン・ガン『少年が来る』を 読んで

書籍名：少年が来る 著作者：ハン・ガン

経営学部3年
中村 安希

私の心に残る1冊はハン・ガンの小説『少年が来る』という作品です。2024年アジア出身の女性として初めてノーベル文学賞を受賞した作品であることを知り、この本に興味を湧きました。しかし、この本を読み、胸を打たれました。1980年の韓国・光州事件を題材に、犠牲となった少年や生き延びた人々の視点からその悲劇と深い傷が書かれている本です。

もっとも心に残ったのは、「死者が語り、生者が沈黙する」という構図です。多くの小説が生者の視点で語られるのに対し、本作では亡くなった少年や被害者たちの「声」が物語の中心となっています。語られずに消されそうになった「死者の記憶」が、私たち読者に突きつけられるようで、強い印象を受けました。

主人公のドンホはごく普通の中学生だが、友人の死をきっかけに安置所で遺体の管理を手伝うよ

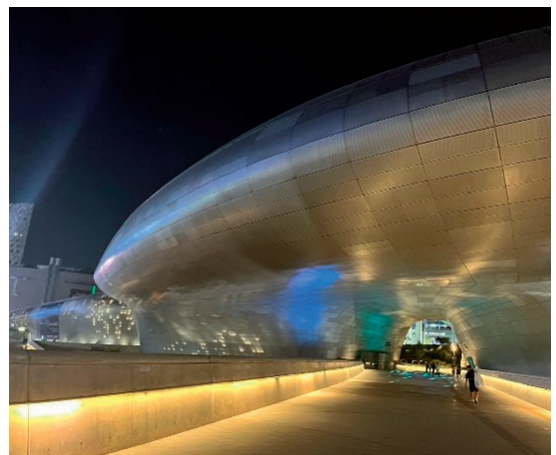
うになります。彼の目に映る死体の様子や人々の悲しみ、暴力の光景は生々しく、読むのが辛くなるほどでした。しかしその描写を通して、「人が人を殺すとはどういうことか」「死者を弔うとは何か」といった根源的な問いが浮かび、自分の価値観を揺さぶられました。何度も「これがフィクションであれば」と願わずにはいられませんでした。

また、ドンホの周囲の人々の視点から描かれる章では、「生き残った者の苦しみ」が丁寧に描かれていました。生き延びたことが罪悪感となり、「自分がこうしていたら救えたのではないか」と悔い続ける姿には、胸が締めつけられました。これは日本における戦争や震災を経験した人々にも共通する感情ではないかと感じました。

『少年が来る』は、「見えないものを見えるようにする」文学だと思います。国家による暴力や抑圧は、どの国や時代にも起こり得ます。だからこそ、私たちは「語ること」を恐れてはならないと考えます。なぜ人が殺されなければならなかったのか、理不尽な死をどう受け止めるのか。この問いを忘れず、語り継いでいくことが私たちの責任だと感じました。今ある命に感謝し、家族や友人との関係を大切にしたい。何度も読み返したい一冊です。



ハン・ガン『少年が来る』表紙



ソウルにある東大門デザインプラザにて

一打の行方

書籍名: ブレイクショットの軌跡 著作者: 逢坂冬馬

経営学部4年
棚橋 美月

逢坂冬馬といえば、デビュー作「同志少女よ、敵を撃て」を思い浮かべる人が多いだろう。しかし、第二次世界大戦の独ソ戦を舞台としたデビュー作よりも、現代日本を舞台とした本書の方が自分を重ねやすいと感じ、今回こちらを紹介することにした。

物語は、一台の車「ブレイクショット」の所有者を通して展開する。所有者は大手企業の副社長、小さな工場の板金工、悪徳不動産会社の営業マン、アフリカで戦争をする青年たちへと次々に移り変わり、一見無関係に見える登場人物たちが、エピソードが進むごとに結びついていく様子が読んでいて心地よかった。



ベトナムやタイでも多くの日本車が走っていた

ここで、私が心に残したいと思った言葉をひとつ紹介したい。

「怒りをおそくする者は勇士にまさり、自分の心を治める者は城を攻め取る者にまさる。人はくじをひく、しかし事を定めるのは全く主のことである」

これは、ブレイクショットの二人目の所有者である小さな工場の板金工の息子・後藤晴斗が、ある事情で不安定になった父親にかけた言葉である。彼は、一人目の所有者である大企業の副社長の息子・霧山修悟と同じサッカーチームに所属しており、立場の違いに翻弄されながらも、二人の夢に向かって努力し続けていた。



晴斗と修悟もこのような場所で
サッカーの練習をしていたのだろうか

私は正直、自分の境遇を不幸だと思ったことはほとんどない。親や友人に恵まれ、呑気に生きてこられた方だと自覚している。しかし、これまで約二十年間“ハズレ”を引かなかったからといって、これからもそうであるとは限らない。もし今後の人生で苦しい状況に直面したとしても、運を嘆くのではなく、自らの力で状況を切り開けるように、経験や知識を積み重ねていかなければならないと感じさせられた。

この本は現代日本を舞台にしていることもあり、働くうえでの姿勢や倫理観、正義感といった、社会に出る前に改めて考えておきたい大切なテーマが数多く描かれている。約600ページと少し長めではあるものの、重さを感じさせないほど展開が巧みで、一気に読ませる力を持った作品になっている。社会に出る前の大学生にこそぜひ手に取って見て欲しい。

余韻を残す一杯の茶 ——『茶館』で出会う中国語と人生

書籍名：茶館 著作者：老舍

現代中国学部
劉 乃華

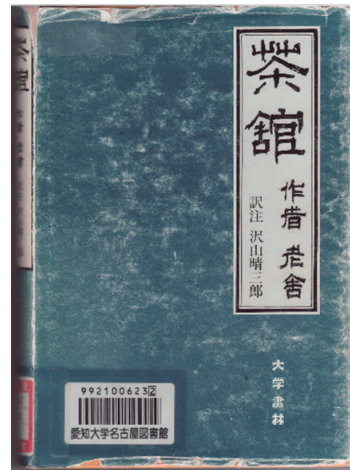
私の本棚には中国語教育の伴侶となった「二人の友」がいます。彼らはいつも私の傍にいて、中国の言語、文化や歴史の窓口となってきました。それは『茶館』の台本と映画作品です。私はこの作品の忠実な読者であり、熱烈なファンでもあります。作品は年月を経るほど味わい深くなるお茶のように、余韻がいつまでも心に残ります。この「一杯の茶」を生んだのは、中国文学の巨匠で、「人民芸術家」と呼ばれる老舍です。

老舍と『茶館』

老舍（1899～1966）、本名は舒慶春、北京生まれ。代表作『駱駝祥子』（らくだのシアンツ）、『四世同堂』（しせいどうどう）、『茶館』（老舍の茶館：ろうしゃのちゃかん）は深い哀れみと人生観で庶民の暮らしを生き生きと描いています。言葉遣いは素朴で奥深く、ユーモアに富んでいます。

『茶館』は珠玉の名作であり、世界に捧げた香り高い「一杯の茶」といえます。この物語は北京の「裕泰大茶館」を舞台に、清末、北洋軍閥（中華民国）、抗日戦争後の三つの時代を跨ぎ、茶館の盛衰で時代の変遷を描いています。物語には、商人、物乞い、語り部、人買い等の70人余りが登場し、悲喜交々の人生が茶館で交差し、半世紀にわたる人間社会の縮図が描かれています。老舍が語る「大きな茶館は小さな社会」なのです。

1958年北京人民芸術劇院（人芸：レンイー）によって『茶館』の初公演が行われてから、『茶館』は劇団の至宝となりました。80年にはドイツ、フランス、スイスで巡回公演を行い、「東方舞台の奇跡」と絶賛されました。83年には、中国の初の



『茶館』（中国語対訳）沢山晴三郎訳註
大学書林、1982年、愛知大学図書館蔵書（筆者撮影）



《难忘的二十五天——〈茶館〉在日本》周瑞祥等编
北京出版社、1985年、愛知大学図書館蔵書（筆者撮影）

訪日現代劇（話劇）として、東京など4都市で23回の公演を行い、3万人余りの観客を魅了して、「老舍ブーム」を引き起こしました。現代劇は20世紀に西洋から日本を経て中国に伝わったものが、老舍によって「舶来の茶」に「中国の味わい」が加わり、70余年を経て、海外に輸出され、東西の観客の心を虜にして、演劇交流史上稀に見る成功例となりました。

『茶館』の言語と文化

他者の言語と文化を知ることが、自らの言語と

文化をはっきりと認識することになり、外の世界へ踏み出すことで内の世界を深く理解できるので。老舎がイギリスで中国語を教えた経験は、西洋の言語文化を理解する礎となりました。彼は誰もが認める言語芸術界の巨匠です。『茶館』の台詞の一字一句は、口に馴染み、耳に心地よく、人々の心に響きます。また舞台の小道具、舞台美術や背景にも中国文化の味わいが込められています。『茶館』は重厚な歴史と文化を備えた傑作であり、中国語学習の楽しみを享受できる教材であります。『岩波中国語辞典』などは例文に『茶館』の台詞を採用し、『老舎言語辞典』は日本の読者が中国語の「韻律」（言葉の音声リズム）を体感する鍵となっています。

私は非母語者（外国人）に中国語を教える一中国語教員として、90年代に『茶館』を中国語の授業教材に取り入れました。ドイツ、デンマーク、スウェーデンなど各国の学生と共に、『茶館』の台詞や映像を読み込みました。私たちは登場人物の運命に、「笑って、泣いて、想いを馳せ」、小さな茶館が描く大きな世界観に浸りました。私たちの学びは、試験、単位の取得、HSK 受験のためではなく、中国の歴史文化と中国語の音韻と語感に対する興味や愛着から湧き出たものでした。そのデンマークの学生が帰国後に、全国中国語試験で第一位になったというニュースを聞いた時、私は深い感慨を覚えました。中国の思想家老子の「無為而治」という理念は、「無為にして教え」、「無為にして学ぶ」ことであり、興味が喚起され、愛するゆえに学ぶことになり、「無為」こそが真の「有為」であるといえるのです。

老舎と愛知大学

『茶館』を語るとき、老舎と日本との縁に触れなければなりません。老舎とその作品が日本に伝わり研究されてきたことは、世界的に様々な「初」を生みました。広島高等師範学校（現広島大学教育学部の前身）の雑誌『海外新声』は老舎の最も初期の詩や小説を掲載し、小説『大悲寺外』（だ

いひじがい）、『駱駝祥子』は日本の翻訳家が最初に翻訳し、『老舎小説全集』（10巻）、『老舎事典』は日本の学者が最初に編集しました。また日本の教授が最初に「老舎学」の設立を呼びかけ、日本で老舎の読書会や研究会が誕生しました。さらに老舎の死の真相を世界で最初に公開し、追悼文を発表したのは日本の作家でした。中国の作家巴金（はきん、ぱきん）は「日本の友人たちは私たちより老舎の死を悲しんでいる」と語りました。

愛知大学が所在する名古屋は、老舎との並々ならない縁があります。世界で最初の「老舎研究会」は名古屋で生まれました。愛知大学と老舎の深い縁は、私たち教員の一番の誇りです。愛知大学の創設者の一人である鈴木沢郎教授（愛知大学辞典編纂所『中日大辞典』初代編集長）は、1951年に老舎不朽の名作『四世同堂』の翻訳を主宰されました。



『四世同堂』鈴木沢郎ほか訳
月曜書房、1951年、愛知大学図書館蔵書（筆者撮影）

この本は出版後に日本で大きな反響を呼び、「日本人必読の書である」と絶賛され、日本で「老舎ブーム」が起きました。また鈴木教授は『老舎年譜』を編纂し、老舎本人と書簡を交わしました。鈴木教授は『中日大辞典』、『華語萃編』、『華語月刊』を主宰し、愛知大学の中国語教育の基礎を築いた教育者であり、同時に老舎作品を普及した研究者であり、日中文学交流の開拓者とし

で先駆的な貢献をされ、その功績は後世に銘記されると思います。

『茶館』の世界

『茶館』は中国の文学作品であり、世界の文学作品でもあります。また『茶館』は中国演劇史に燦然と輝く不朽の名作であり、于是之、藍天野、鄭榕など初代俳優の演技力は、誰にも超えられない芸術の領域であるとされています。『茶館』の台本や映画作品は一杯の極上のお茶のように、繰り返しお茶を入れることで味わいや余韻ができて

ます。

中国語、中国の歴史文化、日中文化交流に関わるすべての方々に、『茶館』の世界に入られることをお勧めします。『茶館』にみられる市井の喧騒を聞いて、中国語のリズム感を味わってください。時代の浮き沈みを見て、民族の喜びや悲しみを知ってください。人々の心の奥深くに触れて、人間の輝きを感じてください。一杯の「茶」から、ご自身の人生の味わいを見つけてみてください。

(翻訳 現代中国学部 藤森 猛)



\\どどん活用してください\\

名古屋語学教育研究室

名古屋語学教育研究室ではさまざまな方法で語学学習のサポートを行っています。
以下の内容を参考に、ぜひ皆さんの語学学習にご活用ください。



名古屋語学教育研究室【通称：語研(ごけん)】のおもなサポート内容

✓外国語検定試験受験の奨励

各種外国語検定試験自主学習支援の制度として、合格者へ奨励金(図書カード)を交付します。
奨励基準や申請については語研で確認してください。

✓外国語コンテスト【8言語10部門】開催

コンテストの課題は、それぞれの外国語科目の特性や実情に応じて設定され、自作のスピーチから、課題文の朗読、暗唱あるいは歌唱まで、多様な形態をとっています。日頃の学習成果を発揮する場として、また、新しく学習を始めるきっかけとして、活用してください。

✓語学学習テキストの貸し出し

語学学習のテキストや問題集、過去問題などの選定や貸し出しを行っています。購入前に自分に合ったテキストを探したり、検定試験対策に活用してください。
【学生用貸出テキスト：貸出3冊まで・15日以内】

✓仏検【春・秋】団体受験※検定料割引制度あり

愛知大学(名古屋・豊橋校舎)団体受験の検定料振込、願書郵送は語研が行います。また、団体受験の申込人数が10名以上で団体受験割引検定料10%割引が適用されます。

✓英語eラーニング利用促進とサポート

英語eラーニング(ALC NetAcademy NEXT)についての質問は、語研で受け付けています。

✓リサイクルテキスト(NHKテキスト)の配布

毎年5月、希望者へ配布します。詳細はLive Capums Uでお知らせします。

このほか、公開講演会開催、Lingua、紀要『言語と文化』発行 など

名古屋語学教育研究室

開室時間：月～金 9:00～17:00 閉室日：大学カレンダーに準ずる(急な閉室あり)

豊橋語学教育研究室 からのお知らせ

ランゲージセンターは
Center Bldg.2階 にお引越ししました！



カフェエリア



カフェエリアは広々♪
ネイティブの先生たちと交流して
語学力に磨きをかける

Language Café 開催中



Language Booth では
個室で映像資料を見たり
自習もできます

Language Booth



Language Room

Language Roomでは
プロジェクターで
フランス映画を楽しむ
Café Françaisも 開催

2025年度 外国語検定試験奨励金制度のご案内

名古屋校舎			豊橋校舎	
言語	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定（英検）	準1級以上	実用英語技能検定（英検）	2級以上
	TOEIC Listening & Reading Test*	650点以上	TOEIC Listening & Reading Test*	530点以上
	TOEIC Speaking & Writing Tests*	130点以上	TOEIC IP	①750点以上 ②前年比100点以上
	TOEFL iBT	50点以上	TOEFL iBT	50点以上
	IELTS	4以上		
	国際連合公用語英語検定(国連英検)	B級以上		
	ビジネス通訳検定（TOBIS）	3級以上		
	日商ビジネス英語検定	3級以上		
	通訳案内士（通訳ガイド）	合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上
フランス語	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上
	DELFS・DALF	A1以上	DELFS・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
◎中国語	中国語検定	4級以上	中国語検定	4級以上
	HSK	3級以上	HSK	3級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4級以上	ロシア語能力検定	4級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4級以上	ハングル能力検定	4級以上
	韓国語能力（TOPIK）	2級以上	韓国語能力（TOPIK）	2級以上
タイ語	実用タイ語検定	4級以上		
日本語	日本語能力（JLPT）	N1級	日本語能力（JLPT）	N1級
	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJT ビジネス日本語能力テスト	460点以上

*名古屋校舎のTOEICは公開テストのみとなります。◎中国語は現代中国学部を除きます。

受付期間 名古屋校舎 ①2026年3月卒業予定者：10月31日（金）まで
ただし、11月1日（土）から1月30日（金）の受験または受験結果および、
10月31日（金）までに申請できなかった者は、1月30日（金）まで申請受付を可とする。

②①以外の者：1月30日（金）まで

豊橋校舎 2025年12月1日（月）～2026年2月19日（木）

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生（協定留学生・大学院生・科目等履修生は除きます）

〔編集後記〕

Lingua 26号では、「心に残る一冊——学生時代に読みたい本」を特集しました。地域や作家ごとに原稿を募集したところ、執筆希望が予想以上に多く寄せられたため、やむを得ず本号と次号の二号に分けて掲載することとなりました。温かいご支援に心より感謝申し上げます。本号では、アメリカやヨーロッパ、アジア各地の本について、執筆者がそれぞれ自分にとって意味のある一冊を取り上げ、なぜその本を薦めたいのかを熱い思いとともに綴っていただきました。この一冊一冊に込められた執筆者らの思いが、この号を手にとってくださった皆さまにも届けば幸いです。執筆してくださった皆さまに、心から感謝いたします。

Lingua 26号編集委員会（朴 瑞庚、島田 了、下村 武、藤森 猛）